

■ 書 評



自閉症スペクトラムの精神病理—星をつぐ人たちのために—

内海 健 著

医学書院

2015年11月 304頁

本体価格 3,500円+税

本書は、「うつ病新時代—双極II型障害という病」（勉誠出版）、「うつ病の心理—失われた悲しみの場」（誠信書房）、「パンセ・スキゾフレニック—統合失調症の精神病理学」（弘文堂）、「さまよえる自己—ポストモダンの精神病理」（筑摩書房）など、幾多の著作によって現代精神病理学の地平線を示してきた著者が、自閉スペクトラム症（ASD）の精神病理学に挑んだものである。満を持してと言っても良いだろう。渾身を込めた力作である。

本書の「あとがき」において、著者は、ASDの精神病理学を意図した理由を次のように述べている。

「精神病理学は、病者を理解する営みである。つまり精神医学の原点に他ならない。…病者がどのような経験をしているかについて理解することは、ASDにかぎらず、精神科臨床の基本である。」

ここで、著者が精神病理学を「病」ではなく「病者」を理解する営みと記していることに注目したい。精神病理学によって「単に障害を理解するのではなく、障害が徹底的に相対化された地平が拓かれる可能性がある」のであり、ASDを「人間の一つのあり方」として理解しようとするのが、本書の狙いなのである。この点が、本書を「障害」としてのASDを解説する数多の書籍と隔てる大きな特色である。

しかしながら、過去半世紀余、「病者」を理解しようとする行為にまつわる権力性、政治性ゆえに、精神病理学は厳しい批判にも曝されてきた。今日では、当事者が最も手厳しい。彼らは訴える、「病の治し方を教えて欲しい、病者としての生き方ではなく」と。無論、著者は、その点に十分に留意し、とくに慎重に論考を進めている。本書が、ニキ・リンコや綾屋沙月

ら、当事者の記述を頻繁に引用しているのは、そのためであろう。ただ、慎重すぎるがゆえに、本書の内容は決してわかりやすくはない。というのも、「人間の一つのあり方」としてASDを理解するためには、読者の多数派（定型発達者）の「あり方」を一旦解体してみる必要がある、その解体された自己を直視する作業がおよそ難儀なのである。本書を読み通すには、とくに序盤に、そうした難儀さを多少強いられることを断っておく。

本書を手にとった読者は、まず「はじめに」（5～7頁）を読み、全体の構成を掴むと良いだろう。評者なりの理解のもとに著者の論旨をざっくりと要約すると、冒頭、著者は昨今の「心の理論」仮説に否を唱える。著者の仮説は、生後間もなくより自己は他者から到来する志向性（例えば、まなざし）により触発され生成し、自己の奥底には、その痕跡<φ>が残されるというもので、ASDではこのφが未形成にとどまるのであるという。そして乳児発達の大きなマイルストーンとなる生後9ヵ月頃に、φによって、「私」と「対象」がそれぞれ別の系として分離する。しかし、ASDはφの未形成ゆえに「私」と「対象」の区分が未分化、つまり「地続き」である。このことが、ASDのさまざまな認知行動特性を一元的に説明する。さらに、ASDの語用論的言語の障害にも言及し、「ASDは言語を道具として用いている」という刮目のテーゼを投げかける。

かような著者の仮説は、真の発達精神病理学と呼ぶにふさわしいが、評者は、著者の恩師、安永浩のファンム空間論を連想した（φは心的距離を与えるという）。事実、終盤（13章）において、ASD者と統合失調症者との鑑別点として、後者は他者の志向性に敏感であり、病前は長い心的距離を維持しているとする安永の指摘を引用している。

本書には、美しい文章の隙間に、多数の事例の記述（vignette）と実に豊富な古今の文献、絵画、図表などが散りばめられている。著者の論旨を追うことに疲れたなら、それらのフラグメントの海に標えば良い。それは実に楽しい。著者らしい魅力は本書においても失われていない。

（黒木俊秀）